

日吉台地下壕保存の会

# 会 報

第53号

発行 日吉台地下壕保存の会  
編集 事務局

(年会費) 一口千円で、一口以上  
郵便振込口座番号00250-2-74921  
(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

会計のお問い合わせ： 白鶴 邦子 港北区下田町1-4-14 045-563-3760  
その他のお問い合わせ： 喜田美登里 港北区下田町2-1-33 045-562-0443

## 2000年度総会のお知らせ

日 時：2000年5月20日(土)  
場 所：慶大日吉キャンパス・藤山記念館会議室  
総 会：2時45分～3時45分  
懇談会：4時～5時半

## 平和のための戦争展 in よこはま

日 時：5月26日(金)～28日(日) 午前10時～午後7時(28日6時)  
26日午後6時半～7時半 トークの夕べ  
会 場：かながわ県民センター 横浜駅下車

## 2000 横浜・川崎 平和のための戦争展(第8回)

日 時：7月22日(土) 午前10時～23日(日) 午後5時  
会 場：慶大日吉キャンパス・藤山記念館 東急東横線日吉駅下車  
入場無料(有料資料あり)

## 第4回戦争遺跡保存全国シンポジウム「南国大会」

日 時：8月18日(金)～20日(日)  
会 場：ホリディ・イン高知(宿泊兼) 高知県南国市  
これまで松代・沖縄・京都と開催されてきました。来年は川崎市で開催の予定もありますので、参加ご希望の方、是非一緒に参りましょう。喜田までご連絡ください。

## 目 次

目 次	ページ
お知らせ	1
この1年を振り返って	2
戦後間もない日吉の町	3～4
地下壕見学会アンケート集	4
連載日吉台地下壕	
当時の関係者の思い出話31	5～7
運営委員会報告	8
見学会のお知らせ	8

## この1年を振り返って

会長代行 大西章

昨年4月より会長代行を引き受けてから1年が過ぎようとしています。それまでの10年間は事務的な仕事のお手伝いはさせていただいたものの、あまり主体的に運動をしてきませんでした。そのような私に会長代行の重責が務まるか不安でしたが、運営委員の方々を始めとする会員皆様のご支援のおかげで何とか1年が経とうとしています。皆様に感謝している次第です。

さて、この1年で私が個人的に一番印象に残ることは、あるツアーに参加して沖縄の南部戦跡を見学し、直接に沖縄や沖縄の人々にふれてきたことです。沖縄平和ネットワークの方のガイドで平和祈念資料館やガマなどを初めて体験してきました。実際に戦跡などの保存活動に携わっている方々と直接にお話も出来ました。そこで感じたことは沖縄の現状と戦争を語り継ぐ大切さです。日本で唯一の地上戦が戦われた沖縄の方々が客観的に事実として、戦争を知らない世代に語り継ごうとして努力していることです。歴史の重みに耐えるように、黙々と若い人も含めた、たくさんの方々が協力して活動を行なっていました。またその活動が生活の一部になっていることです。生活に密着した運動には大変感動しました。

もう一つ、身近な日吉から蟹ヶ谷、登戸までのピースロード構想のフィールドワークとして、日吉台地下壕には何回か見学に参加させてもらいました。日吉駅の反対側にある海軍艦政本部跡の地下壕にも初めてもぐりました。この見学会は縄文式時代から始まる歴史の流れに沿ったもので、日吉の町の成り立ちがよくわかりました。このように、ピースロード構想はその土地や生活に密着した構想ですので、もっと発展させ、広めていきたいと考えています。

その他に時間が許す限りいろいろな行事や会議に参加させてもらいました。今年度の活動方針案にみられるように今年の7月の「横浜・川崎平和のための戦争展」、また来年8月の「戦争遺跡保存全国ネットワーク神奈川大会」の準備などたくさんの行事と共に、見学会実施、行政との交渉など仕事が山積しています。この社会情勢からも簡単な問題は一つもありません。私も含めた運営委員だけでは力不足でありますので、会員みなさまのご協力をお願いします。

戦後間もない  
日吉の町

安藤喜代司

一九四五年八月二五日、慶応大学に米第八軍通信隊の兵隊さんが、約七〇〇人進駐して来ました。同時に岡本自動車（現在のユニー）、陸軍航空試験場（現在の警察学校）も接収されて、日吉の町は一日中、駅も通日も連合軍の兵隊さんでひしめいておりました。

私はふとしたことが縁で伝（つて）を求めて、九月一〇日から通信隊の将校食堂にK P（キッチン・ヘルパー）として勤めるようになりました。現在の学生寮の一番北側の棟（北寮）でした。三棟（南寮・中寮・北寮）ある学生寮に百人近くの米軍将校が住んでおり、中には黒人の将校や、

横浜の山手で高校時代迄を過ごしたと言う日本語ペラペラの将校もありました。戦争中は鬼畜米英と教えられて来ましたが、恐る恐るの仕事をしておりましたが、彼等の優しくて親切な事、「料理の残った材料は全部家に持って帰り、お父さん、お母さん、兄弟に食べさせてあげなさい」と証明書を書いて持たして呉れました。毎日一斗缶に一杯の残り物を家に持って帰り、食べ切れない物はヤミで売り、相当のお金を儲けました。結局朝鮮戦争が始って彼等が朝鮮に出兵する迄働き、それが縁で日吉に住むようになりました。

勤めてからしばらくして、南寮と中寮の間にある地下壕の入口から、懐中電灯を持って地下に下りました。地下壕の天井には換気筒がついてお

り、床には机や椅子や書類棚が散乱していました。その上、書類の山で足の踏み場も無いくらいでした。余り奥迄行っで出口が分からなくなつては大変とすぐ上つてきました。

地下壕の入口は高校校舎の端に一カ所と台地の斜面の下に三カ所ありました。一年位経ってから友人とまた地下壕に入りましたが、其時にはもう中の物品は何一つ残っておりませんでした。近所の人達が全部持去ったという噂です。地下壕の大きさには驚きました。

日吉の駅には夕方になると東京・横浜方面に外出する将校や兵隊さんを相手に、十数人のパンパン（売春婦）が屯（たむろ）していて、話かまとまると駅周辺の貸し部屋で商売をしていました。また、綱島では戦前にあった遊郭が

売春宿となり大繁昌しておりました。夏になるとグラウンドや地下壕の中で商売をしていて、ある時金銭上のトラブルで黒人兵がヤクザに殺された事がありましたので、地下壕の入口は全部米軍によってコンクリートでふさがれてしまいました。現在農家の庭からの入口が一カ所残っており、地下壕見学の時、入れさせて貰っております。

戦前、寮生が入っていたローマ風呂は、現在煙突が取りはずされ、鉄骨だけ残っている廃墟となっております。勤めていた当時はローマ風呂の上に床を張り、毎月一回将校の慰安に、歌や踊りや手品等を芸能人達が来てやつておりました。

勤めた翌年の春、南の方からとても良い匂いが漂って来ますので、寮の屋上から綱島

の方を眺めますと、一面桃畑が続いておりました。昔網島は桃の名産地で、明治三六年に網島町の池谷道太郎氏が、「日月桃」と言う新種を開発して、最盛期には二四万ケースの出荷量を誇り、町全体がピンク色に霞む程でした。横浜の関内迄リヤカーに積んで、外国人達に売りに行っていたとの事です。しかし、昭和一三年秋、鶴見川の大氾濫で全滅し、殆どの農家が桃の栽培を止めてしまいました。幸いな事に被害を免れた日吉地区に広がる畑は栽培を続けました。又、無花果（いちじく）の栽培も盛んで、とても大きな無花果がとれました。日吉と網島の間の桃畑は松下通信が工場を建てたのが始まりで、現在は中小企業の工場と住宅街になってしまいました。

## 地下壕目元学々ムム アンケート

（感想相心） 集木

◆地元にもこのように重要な戦跡があることを知りませんでした。学生時代から平和運動に関わってききましたが、こんなに身近に当時の現実を体感できる場所があったとは、改めて驚きました。

地下壕の保存と、多くの人々にこの場所を見て、知ってもらうことに、微力ですが協力してゆきたい。（四〇代男）  
◆所々に残る機械や道具を取り付けていた跡を見ると、こんなことが行なわれていたのかとよく分かりました。

今は全く人の存在など感じさせず、ただ冷やかな冷気とコンクリートを通して出てく地下水の滴りが、鍾乳洞のように石化しているのを見て、五〇数年の歳月を感じ、二度と

同じことを行なわせてはいけないと思いました。

マイナスの遺産である戦跡を保存し、教訓として、平和を進める運動に取り組んでいらつしやる皆さんに敬意を表します。私は平和教育や平和運動を組合の仲間と進める中で連携したいと思います。（五〇代女）

◆すぐ近くに住んでいながら、あのような戦跡があることを全く知りませんでした。目と耳を働かせて眺めれば、身近に戦争の爪跡は根深く残っていると痛感しました。

私は目が悪いのですが、氣遣ってライトを照したり、ゆっくり歩いてくださり、感謝しております。

昨夏の戦争協力法案や改憲の動きのもとで、壕の暗闇が決して過去のものではないと感じました。

学校の自由選択や、教育の制度・内容が細部まで統制されてゆく動きは、半世紀前を髣髴させます。恐ろしいことです。（女）

◆松代の地下壕のことは知っていました。日吉台のことは始めてしりました。

母の話に戦中は米も供出、寺の鐘や佛具も鉄砲の弾になり、母の兄はどこかの海で船と共に沈められ、遺骨箱には石ころが入っていたとか。

軍だけは安全な所から、指令・命令を乱発・・・戦争は人を殺すこと以外の何ものでもないなどと思いながら、地下壕をあるきました。

日吉台地下壕は今のままの状態。保存をお願いします。過去は現在に、そしてこれから先につながるのですから。（四〇代女）

## 連載

## 日吉台地下壕

当時の関係者の

思い出話

31

美松 譲

## ★予備士官の一日

昭和19年7月（東京の霞ヶ関から日吉に移転した直後）までに、学徒動員などによる大学出身の予備士官30名の配属によって、われわれがかねてから企図していた対米情報機構が強化され、組織もようやく整備されるにいたった。

こうして、作業はこまかく分けられ、各自の担当分野はせばまり、物事を深くほり下げてじゅうぶんに検討し、それらを総合して判断するという、情報作業の常道である合理的な推理の方法が実施できるようになった。

これら予備士官は、慣れない作業、縁の下での力持ちみたいな地味な仕事と真正面からとりくんだ。青年の意気と国を愛する熱情を、自分にあたえられた分野の一点に集中するのであった。かれらの精根をかたむけた真剣な態度のなかに、私は無言の尊敬と訓戒を見出さずにはいられなかった。



かれらは、全世界にまたがる米軍の作戦地域における一艦一艇の動き、飛行機一機の行動とてももらすまじ——と懸命の努力をつづけるのであった。そのころ、われわれの部屋の外の廊下にまで、一種異様の空気がただよっているといわれたが、それは予備士官たちの気魄から発散する

”妖気”のためであつたろう。

勤務時間がおわると、一同そろって夕食をとる。しばらく休憩したのち、対米情報課の総員が集まってブリーフィングを始める。主任の予備士官たちは、それぞれの分野について、その日の作業成果などを報告する。課員は必要な指示をあたえるとともに、その後の作業のやり方について教示する。

作業はつづき、やがて9時

ごろとなる。軍令部副官から情報部に配属される夜食、いつも対米情報課がひとりじめが一同にくばられる。予備士官らは夜食をほうばりながら、その日の作業をまとめる。彼らが家路につくときは、いつも10時をまわっていた。そして電車でゆられながら瞑想する脳裡を去来するものは、きょう一日の作業のことであり、あすの作業への準備であつた。

こうした血みどろな努力が、むくいられぬはずがない。かれらの腕は、めきめきあがった。彼らの苦心の結晶は、適正な敵作戦の企図判断に、正確な戦果の判定に、米軍兵力配備の推定に、そのほか数多くの有益な情報として、みことな実を結んだのである。

## ★地下防空壕の思い出

昭和20年7月ごろ、われわれは事務室などにあてていた地上の校舎から、いよいよ日吉台の地下防空壕内で執務することとなる。中央の情報部なども決戦態勢にはいったわけである。

## 現慶応義塾高校校舎の終焉

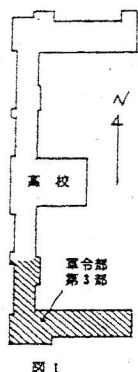


図1

ところで、防空壕といっても校舎の裏の台地に掘った長いトンネルの連続にすぎず、多くの出入口のある簡単なものだった。

トンネルの地肌が見えないように、いちおう白木の板がうちつけてあったが、壕内の

湿度はとても高かった。机も

普通のものではなく、白木のままの極めて簡単に急造した粗末なものであった。しかもその大きさは縦が90センチ、横が120センチほどのものが最大で、もつと小さいものが多かった。引出しが二、三か所についていたが、取手は木片をうちつけたものだった。

また、椅子も机とおなじく、日曜大工がこしらえたような代物で、とても椅子とはいえなかった。

大机は二人で供用し、小机は一人用であった。だいたい二つずつ向い合わせ、一方を壁にくっつけ他方が通路に面して並べられていた。だが、その通路たるや、二人がすれちがうには、ちよつと狭かった。ただ、ところどころに少し広いところがあるが、数人が集まれる小室があり、

壁には棚がつくりつけてあった。

こうした壕内で、われわれは以前のように、究理をつくす合理的な対米情報作業を続けたのである。

天がわれわれの努力をあわれんだものか、こうした終戦に近いときでも、シベリア鉄道を經由したクーリエ便で、

アメリカの新聞ニューヨーク・タイムズや雑誌・タイム、ライフ、ニュースウィークなどの資料が、いまままでおり入手できた。また、スイスのジュネーブからは、空色の紙に印刷された航空関係のニュースもとどいていた。

われわれは、これら資料などを取り組みながら、対米情報作業の有終の美をおさめるべく努力しつづけたのである。

## ★本土決戦に備えて

沖繩の戦局がほとんど決定的となり、敵のわが本土進攻も遠からじ、と思われた昭和20年6月はじめごろから、本土決戦にそなえて配属された59名の予備士官と従来からのものに対して、本土決戦のための情報・諜報に関する速成教育が行われた。

この教育は、たしかにドロ縄式のものであったが、教育項目は対米情報作業の要領、米軍の戦法、捕虜尋問の要領、適中を潜行する諜報活動など、さしあたって必要と思われるものばかりだった。

短期間の速成教育ではあったが、時局が反映したもののか、教えるほうも教えられる側も文字通り真剣そのものであり、教育の目的をおおむね達成することができた。

こうして7月下旬、速成教



育をうけたものの約半数と、それまで対米情報作業にたずさわっていた予備士官を合せて48名が、情報部の本土決戦配備の第一陣として配備につくこととなる。

われわれは、これを日本武尊の古事「叢雲（むらくも）の剣」にあやかり、叢雲隊と命名した。48名の予備士官は11班に区分されて、鎮守府と警備府および主な艦隊の司令部に配属される。一つの班は6名ないし3名で編成され、情報作業をひと通り心得た大尉または中尉が班長となった。これら予備士官は、配属された司令部の情報参謀の下で対米情報作業にあたるとともに、東京の軍令部情報部との密接な連絡をたもち、かつ敵がわが本土上陸に成功した場合には、情報と諜報活動の基礎となることになっていた。

われわれが、この隊の呼称を日本武尊の古事にあやかっただのは、武尊がわが国における情報活動の元祖ともいうべきであったからである。

それはともかく、当時、学徒動員などによる予備士官は、軍服のほかは学生服しか持ち合せがない。軍服では敵陣内を潜行するときに困る。なんとかして、よれよれの背広でもつくってやりたい。さっそく東京をあたってみた。が、どこにも生地はない。大阪なら、あるかもしれない。同地の警備府にたのんで問屋筋などを隈なくさがしてみたが、ここでも見つからなかった。携行物件としては、小型ピストルなどの隨身兵器を、ひそかに準備する。また、当時の軍人はほとんどイカグリ頭であったが、それでは職掌がら都合が悪い。珍妙な「長髪

令」によって、みんな髪をのばすこととなる。だが、終戦となったときは、まだモノになるほど髪はのびていなかった。

#### ★遺影を準備す

このように、対米情報課の約半数が本土決戦の第一線配備についた頃だった。われわれ中央に残っている者とてもさほど遠くないうちに、こうした配備につくこととなる。いうなれば、明日の運命もはかりがたき身である。

だれが言い出したか、だれいうとなく、「どうだろうか、われわれも、ひとつ仏壇にかざる最後の写真をとっておこうじゃないか……」

という話がでる。

「うう！ よかろう、そうしよう」

と、たちまち衆議一決する。

——そうと決れば、早いほうがよろしい。

その明くる日だったか、そのころ海軍省の御用商人であった、東京・築地の写真屋G.T.サンに出かけた。

もはや写真屋は営業がなりたらず、表のガラス戸を締めて内側からカーテンが引いてある。戸をあけて店内にはいり、用件をのべて撮影を依頼する。

久しぶりに着るネイビー・ブルーの第一種軍装、戦時中は主としてウグイス色の第三種軍装、略綬でなくして持っているだけの勲章と記章を胸につけ、正規の金モールの参謀飾緒、当時は木綿の黄色い二本の綱の略緒をさげ、よそゆき顔をしてレンズにおさまったものだ。

(生協ミース教員養成所より)

